

科学と社会委員会（第24期・第12回）・科学と社会企画分科会（第24期・第4回）
合同会議 議事要旨

1 日時 令和2年3月13日（金） 10:00～12:00

2 場所 日本学術会議5階 6-C（2）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、小林 傳司（第一部会員・副委員長）、
高橋 桂子（第三部会員・幹事）、遠藤 薫（第一部会員）、
藤原 聖子（分科会幹事・第一部会員）、平井 みどり（第二部会員）、
高山 弘太郎（連携会員・分科会副委員長）、沖 大幹（連携会員）、
高瀬 堅吉（連携会員）、坪井 俊（第三部会員）、藤井 良一（第三部会員）、
（説明者）中村 征樹（連携会員）
（欠席）松浦 純（第一部会員）、甲斐 知恵子（第二部会員）、西村 いくこ（第二部会員）、
小安 重夫（第二部会員・幹事）、古谷 研（第二部会員）、中村 崇（第三部会員）、
蟹江 憲史（連携会員）、川口 慎介（連携会員）、西島 一欽（連携会員）
（事務局）鳥生審議専門職

4 議事要旨

（1）報告案の内容審議

- 藤原委員及び執筆者より、資料1-1に基づき説明があり、意見交換があった。概要は以下の通り。
 - ・前期に表出された環境学委員会の報告（資料1-3）から取り組みが進んでいることを示す必要がある。そのポイントは、①取り組みを進めるために何が必要か？ ②日本らしい取り組みとは？ だと思ふ。
 - ・現在の案で現状分析は出来ていると思うので、ではどうすべきなのか、ということを示すべきだと思う。学術会議は更にSDGsに貢献するのか、あるいは、SDGsをきっかけとして科学と社会が関わっていくのは本当にいいことなのか等、次につながる話を三つくらい示せば良いと思う。今期の議論によって得られた新しい知見を示すべき。
 - ・前期の報告は環境とグローバルが中心と読める。新型コロナウイルス等の現在の社会状況を見ても、個人を大切にする、心や身体を大事にするというのを打ち出した方が良いのでは。
 - ・報告案13pの「無関心な公衆」「否定的な公衆」にどうアプローチするかが一つの論点になる。
 - ・現在疑似科学が非常に広まっている。専門知が軽視されているのを訴え、専門知を公衆に届ける、という方向性が一つあるだろう。一つの答えがサイエンスカフェだが、それだけでは足りないので、学術会議、日本として考えていく。
 - ・例えば新型コロナウイルスを巡る混乱にしても、皆が公衆衛生についての正確な知識を持っていないのが原因。個人をターゲットに教育するのが重要になる。
 - ・若手アカデミーでやっている、公衆がステークホルダーとして科学に関与していくシチズンサイエンスは、SDGsの観点からも次のステップとして打ち出せると思う。
 - ・若手アカデミーで取り組んでいるシチズンサイエンスの事例として認定心理士がある。これは学会で認定しているが、心理学の学部を卒業した程度の専門性を持つ方が市民として活動している。この方々には、災害時の正常性バイアスの在り方等でデータ集め等に参加してもらっている。市民が参画することで、アウトリーチ活動とは違った新しい科学リテラシーが生まれるのではないかと思っている。

- ・無関心な公衆の一方、無関心な科学者も居る。SDG sをやっていると競争から外れるという理由でSDG sに対して無関心になる。SDG sをやってプラスになる指標があれば良い。
- ・小中高生のSDG sの認知度は高く、進めるべきものという意識は強いと思う。その子たちが大人になる十年後に向けて提案していく方向性はある。
- ・BSEや東日本大震災で専門家の信頼が崩れた。他方でフェイクニュースや疑似科学で物事が動くことがある。アウトリーチ活動やサイエンスカフェで正しい知識を与えることは大事だがそれだけでは済まなくなっている。科学者が学ぶことも必要で、現場とSDG sを学ぶことで目標の設定がしやすくなる、という方向性があるだろう。
- ・専門家でも意見が違うことがある。それをどう扱うか。
- ・あるリスクが危険か、そうでないかは、学術的には判断できないのではないか。
- ・事実の確認、事実は一体何なのかを押さえることは、科学者として統一的に出来るのではないか。
- ・アメリカのシチズンサイエンスでは、研究とはどういうものなのか、データを集めるとはどういうことなのか、データの不確実性含めて、科学というものを学んでいる。
- ・自分で判断したい人が信頼できるデータ、まとめてみられるようなシステムの共有は出来るのではないか。
- ・アウトリーチ活動において知りたいことと、伝えたいこととは違う。知りたいことは、訊かないとわからない。
- ・これらの一環で、新型コロナウイルス対策について何か書く必要があるだろうか。→前書きや総論のような部分で触れることは出来るのではないか。
- ・若い世代はリアリティのある問題を持ってくれば興味を持ってくれる。
- ・テレビよりネットを見ている世代に、学術会議はアプローチできるかもしれない。あることについて学術会議の各分野の専門家がどう考えているか、というチャンネルを設ける意義はある。迅速性を重視し、知りたいことと伝えたいことのギャップを埋めるものとして参考になると思う。
- ・現状で学術会議はSDG sと関連する提言等を一覧にしてHPで公開等しているし、それらの効果があったのならば書けばいいと思う。
- ・皆様の執筆内容を尊重しつつ、前期報告から何がプラスになったか見える形にすることが必要で、それに沿う形で各章を直すのが現実的だろう。時間的には7月末までに査読を終える必要があり、そのためには6月末までには原稿を完成させなければならない。
- ・若手の記述は整理して分解して入れたい。
- ・報告のメッセージを決めることが重要である。例えば以下のようなものが考えられる。
 - ✓知りたい、知らせたいのギャップ
 - ✓世代間ギャップ
 - ✓正解が出るのが科学という誤解を解くこと
- ・人々が科学にコミットしていないのが一番良くない。科学を身近なものにしたい。そのためは、知りたい、伝えたいことのつながりをどうするか、またデータの整理が必要、ということは言っても良いのでは。
- ・SDG sを通して学術と社会の在り方が緊張関係にあるのか友好関係にあるのか、というメッセージは残す価値がある。
- ・今期の方針の一つは対話だった。シンポジウムでの参加者との対話に工夫が必要かもしれない。
- ・シンポジウムだけでなく、議論の場のデザインを変えていくことも必要。サイエンスカフェの良い要素を取り入れたり、ワークショップ形式にするなど。これらは報告というよりも申し送り事項かもしれない。

- 以上の議論を踏まえ、藤原委員が内容の順番も含め整理を行い、最後の取りまとめ部分の案を作った上で、SDGsの観点から沖委員が確認し、その案を以って委員間でメールにて意見交換を行うこととなった。また、最終的には渡辺委員長及び藤原委員一任とすることで了解が得られた。

以 上